

絵本はやさしい哲学書



翻訳家 みらい なな

生きるとは 死ぬとは

絵本『葉っぱのフレディ―いのちの旅―』（レオ・バスカーリア作／童話屋刊／この作品は「好きな作品を選び、自ら取り組もう」の二年に掲載されています。）の初めに、編集者の田中^{たなか}和雄^{かずお}氏からのメッセージがのっています。

「この絵本を 自分の力で考えることをはじめた子どもたちと、子どもの心をもった大人たちに贈ります。わたしたちはどこから来て どこへ行くのだろう。生きるとはどういうことだろう。死とは何だろう。人は生きていくかぎりこうした問いを問いつづけます。この絵本が自分の人生を『考える』きっかけになってくれることを祈ります。」

読者からの返信も一万通を超えています。

・京都に住む五歳の男の子は「いのちは くるくる してるねん」と書いてきて、日野原先生をアツと言わせた。

・小樽の十八歳の高校生は「価値のない人間なんてどこにもいない！みんなその人生をまっとうすれば、それはとても価値あるものですね。ダニエルのこととおり、まだ経験したことのないことはこわいと思う。ほんとつだと思います。この本を読んで『命の大切さ』というよりは、命の意味、命の存在価値を学べた気がしました。何十年かたって私に子どもができたら、読んで聞かせてあげたいです。」

・福岡の二十歳の大学生は「子どもから大人まで、生きるといつことを考えさせる本でした。作中で死ということとを怖れたフレディが『本当に生まれてきてよかったのだろうか』と問いかけるシーンに自分を重ね合わせて読みました。生きる意味を見失いかけた時、この本のページを開くと、自然に導いてくれるようです。」

・福岡の十七歳の高校生は「生きる、死ぬ、まったく違うものだと思っていたけれど、実は強くつながっていたのですね。死とは怖れるものではなく、自然と大人になるように、自然と季節が変わるように、本当に自然なこ

このメッセージを読んだ聖路加国際病院の理事長、日野^{ひの}原^{はら}重明^{しげあき}先生は、母校の京都大学にあるポール・ゴーギャンの大作絵画「我われはどこから来たのか、我われは何物か、我われはどこへ行くのか」を思い出され、同大学の開学百年の記念講演のタイトルになさいました。前後して「葉っぱのフレディ」のミュージカルのための脚本を執筆され、(『フレディから学んだこと―音楽劇と哲学随想』／童話屋刊)そのエッセーの中で「この『葉っぱのフレディ』の物語の中には、人間が生きることのすべてが含まれている。私は人間のいのちの由来と、そのいのちをどう生きるか考えてみたい。」ということを書いておられます。



となのですね。」

いずれも返信の最後には「ありがとっございます」と謝意が述べられています。読後の共感や感動が深いと、自然に感謝の言葉がでてるものなのだと知って、あらためて原作者（レオ・バスカーリア）の哲学的意図を正しく翻訳することの責任の重さに、背すじがぴんと伸びました。

どこから来て、どこへいくのか

シャーロット・ソロトウの絵本『おかあさん』（アニタ・ローベル絵／みらいなな訳／童話屋刊）は、まさに「私はどこから来たのだろう」という哲学命題に正面から答えている絵本です。

—— ちいさな女の子が、お母さんの古い写真を次から次へと見ていきます。はじめはお母さんが赤ちゃんだったときの写真で、それから大きくなって、結婚して、赤ちゃんを産みます。

作家の島田^{しま}雅彦^{まさひこ}さんがNHKの「ようこそ先輩」に出演して、母校の小学生に出したテーマが「恋愛小説を書いてみよう」でした。子どもたちは初め「えー、恋愛小説？」とか「したことないもん」とかさわわぎになりましたが、島田先生の誘導は上手でした。「君たちの

お父さんやお母さんに、どういづプロポーズだったのかきいてみよう」と宿題を出したのです。

一人の女の子をカメラが追います。女の子のインタビュ―は真剣でした。お父さんもお母さんも、思わぬ質問にたじろじとなりながらも、いつしか女の子にきちんと対峙して受け答えをします。やがて女の子は、自分はいまこの目の前にいるお父さんとお母さんが出合つて結婚したから生まれた、という厳肅な事実を知ります。

NHKのカメラは女の子を追い続けます。そしてついに女の子は、自分の出生の奇跡のような事実に気づき、感動してとめどなく涙を流します。真実を知る、ということが、かくも人を感動させるものなのか、をこの映像



はきわめて正確にとらえていました。

私はこの『おかあさん』の本が出たあとで何度も見返してみました。最後のページの赤ちゃんの絵を見てからまたはじめりのページを見ると、小さな女の子が写真を見ていて、その写真の主は赤ちゃん、つまりその小さな女の子のお母さんなのです。つまり、歴史は繰り返すのだな、順送りなのだ、いのちは循環しているのだ、と判ります。

その循環が正確に行われているのは、いのちのとなみ（仕事）の賜物なのです。

人生のしあわせ

『しあわせな ふくろう』（ホイテ・マ文ノピヤッチ 絵／大塚勇三訳／福音館書店刊）はオランダの民話の絵本です。

—— あるところに、ふくろうの夫婦が住んでいました。二人は仲よしで幸せに暮らしています。すぐ近くにお百姓の家があつて、にわとりやあひるが飼われていました。みんなは、来る日も来る日もおなかいっぱい食べて、飲んで、そのあとは、けんかに明け暮れるのでした。みんなは仲よしのふくろうを見て、なぜあの二人はけんかをしていないのだらう、と不思議でした。ふくろうはそのわけ

をみんなに話します。「この世界では、春になると花が咲いて、夏には葉が茂り、秋になると実がなつて、冬は雪でまっ白になります。その、めぐりめぐる自然の中で、一緒にいることが嬉しくて、—— 幸せなのですよ！

幸せだから けんかなんかしらないです。」
ふくろうが話し終わると、にわとりやあひるたちは「まあ、なんてバカバカしい！ そんなことより、食べた

り飲んだり、けんかしている方が、よっぽど楽しいわ！」



とがやがや言つて、走つてかえつてしまいました。

ふくろうは目をパチクリさせて、何事もなかったように、二人ともゆつくり体を寄せあつたのでした。

この世界で夫婦が仲よしでいることが幸せのもとになっています。夫婦が仲よしならば家庭は平和です。いのちのいとなみが大自然を変化させているように、人びとのくらしもつねに新しいいのちにめぐりあつて生かされています。この絵本は、ですから、平和の根源は平和な家庭にあることを雄弁に物語っているのです。

絵本作家のラッセル・ホーバンは、「お話は赤んぼうと同じで、宇宙のエネルギーが生み出すのだ。書いてくれ！書いてくれ！とすごい力で喉を押してくる。書かないと、首をしめられるような苦しさだ。」といました。子ども時代の記録者と呼ばれるシャロット・ゾロトウは、「お話は自分と子どもたちの人生の中から生まれた。」といました。そのように生み出された絵本は、謂わば、命の雫、生きものであるといえないでしょうか。深く読むべし。子どもも大人も中高生も、絵本から人生を学ぶ重要性を侮つてはならないと思つ所以です。

絵本は生きています。子供も大人も中学生も絵本から人生を学ぶ重要性を忘れてはなりません。